

骨董・古美術をもっと知りたい

初源伊万里って何？

2017
Mar. **3**

平成29年3月11日発行（毎月11日発行） 定価480円

No.486
Monthly Art Magazine
"Mind's Eye" Since 1977



特集
古唐津と初源伊万里

出光美術館開館50周年記念

「古唐津——大いなるやきもの時代」

自在屋勝見充男さんと行く初源伊万里の旅

美の仕事

原研哉 ルーシー・リーをみる

Special Preview

MOA美術館

リニューアル

特集◎古唐津と初源伊万里◎第二部

「自在屋」かつみみっお 勝見充男さんに行く

初源伊万里の旅

やきもの好きの方々と話していると、「初源伊万里」という言葉が時折出てきます。とくに唐津や伊万里愛好家にとっては特別な思い入れがあるようですが、なんとなく古唐津と初期伊万里の「あいのこ」のようなものか、と簡単に片付けていました。ところが今回、勝見充男さんから「一緒に初源伊万里を見極めに行かないか」と誘われ、酔った勢いで有田へと旅立つこととなりました。はたして、初源伊万里とはどんなものなのか、今回は読者と一緒に追いかけて行きたいと思います。

協力：有田町歴史民俗資料館、上野至、豊増一雄、岡岡初源堂、

矢野直人、山本ゆき、山本亮平

企画構成写真：勝見充男、村多正俊、井藤丈英

夢と現の初源伊万里

勝見充男

夢と現の狭間にある焼物。それが私にとつての『初源伊万里』である。

小皿や染付も若干あるが、特に『初源』を色濃く残しているのが、無文の盃である。形状は、唐津、もしくは李朝。ややクリームがかった半陶半磁が多く、その肌の柔らかさは美濃陶に近い。なんと言つても、その魅力は、草創期に宿る力強さであり、見た目も手にした感じも、いわゆる初期伊万里、蘭図の盃などとは、一線を画す存在感がある。

染付も若干あると書いたが、この盃の形状の物に限っては、ほんの二、三種類を残すのみである。それは草の上に点々が描かれていて、それが露の雫だろうか、それとも簡略された山脈に連なる木々なのかと眺めていたら、とある資料に点の位置が二本線の下側に描かれている陶片の写真を見つけ、今をもって何を表現したのか分からない(50頁中央参照)。

また、これまでの私の情報では、発掘、呼び継ぎの参考品ばかりで、状態の良い伝世品は、一点も目の前にした事はない。そのような謎に満ちた、この盃の『夢』を語るとしたら、朝鮮陶工が故郷を想い、

自ら内在している魂を轆轤に託し、陶器よりも過透性が少ない清潔な磁器を目指しながらも、乏しい材料と技術故、試作段階で姿を消してしまふ李朝色たつぷりな幻の焼物。

反対に『現』に目を向けると、美濃陶に近い柔らかな肌合いは、ただの焼きの甘さで、当時の唐津の職人に、磁器を作るべく材料を与え、商品化しつつも、ほとんど売れずに生産が途絶えてしまふ粗悪な失敗作、となる。

いずれにしても、磁器の祖とされる李參平という人物が、初源が焼かれた小物成、天神森の窯に、どれだけ関与したかどうか気になるが、歴史の年表上には、唐津から伊万里に移行するグレートゾーンはなく、伊万里の発生だけにスポットを当てている。

だが、二年前の春、仕事で唐津に赴いた際、そのグレイゾーンの代表たる一点の品物に出合ったのである(58頁)。それは、伊万里の盃に、同じ形状の唐津の陶片が重なって付いていて、これを見ると、この窯の唐津と伊万里は、同時期に同じ陶工の手に依る物だというのが立証され

るのである。

つまり、文化は年表の如く区切られるのではなく、グラデーションのように滲みながら様を変えていくもので、まさにこの盃は、唐津と伊万里の変換期の象徴としての一点に揚げられるのではないだろうか。

さて、この度、長年憧れ続けてきた『初源伊万里』の『夢』と『現』が交わる一点を捜し求め、私と同行二人で伊万里へ向った。

現地では、歴史民俗資料館の学芸員、今、初源を意識して轆轤を挽いている作家陶家や地元のアマチュア陶家達が、私達を待っている。

日本陶芸史上、全く忘れ去られている『初源伊万里』の名称の設定や現時点での定義付けはもとより、その正体を誌面に発表するのは、この特集をもって初めての試みとなる。

何より、これを機に、この愛くるしくも堅牢で魅力に満ちた白磁の盃を、目線の上に揚げながら読者諸氏と共に賞味できれば幸いである。



旅のスタートに伊万里焼の原料を採掘した泉山礎石場を望む勝見さん

初源伊万里の古窯をあるく



こもんなり
小物成

小物成窯跡
 本町教育委員会
 昭和六十一年五月
 有田町教育委員会

今回の旅人である藤見亮男さん（白倉屋主人）と案内人の村多正俊さん。古唐津プロダクト展覧会（主催者・古唐津研究交流会）有田。窯跡多ある古窯のなかでも初源伊万里を産した窯跡と数少ない。今回は小物成を起点として四高町の窯跡を歩いてみた。初源伊万里の窯跡はみつかるといふ。

熱心な古陶磁ファンが語り継ぐ「初源伊万里」。その実態はどういうものか。今回の旅の目的はそこを明確にすることだ。そこで有田エリアで古くから陶器と磁器を同時に焼成し、初源伊万里というものを産していた現場である古窯跡に足を向けた。古唐津目線、初期伊万里目線では「見えていなかったもの」が現場に在った。

① 小物成古窯

有田町教育委員会による調査では少なくとも三基以上の登り窯が在った事が確認されている。また、一七世紀初頭の築窯で操業は三十年弱だったのではと推定されている。窯跡下の住宅裏の低丘陵上に史跡碑があり窯跡と知れる。辺り一面に散在する皿や碗の陶片、磁片。何度も同窯を訪れているが、今まで気がつかなかった明らかに初期伊万里の中国風、というより朝鮮半島の空気が色濃く漂う高台を有する磁器ものも多く見られた（一昔前までによく見られた白磁小盃の欠片がほとんど見られなかったのは残念だった）。発掘された磁片にはまるで唐津のような筆致で染付がされているものも見受けられる。古唐津と初源伊万里を考察する上で重要な古窯跡であると言える。



天神森
てんじんもり



② 天神森古窯

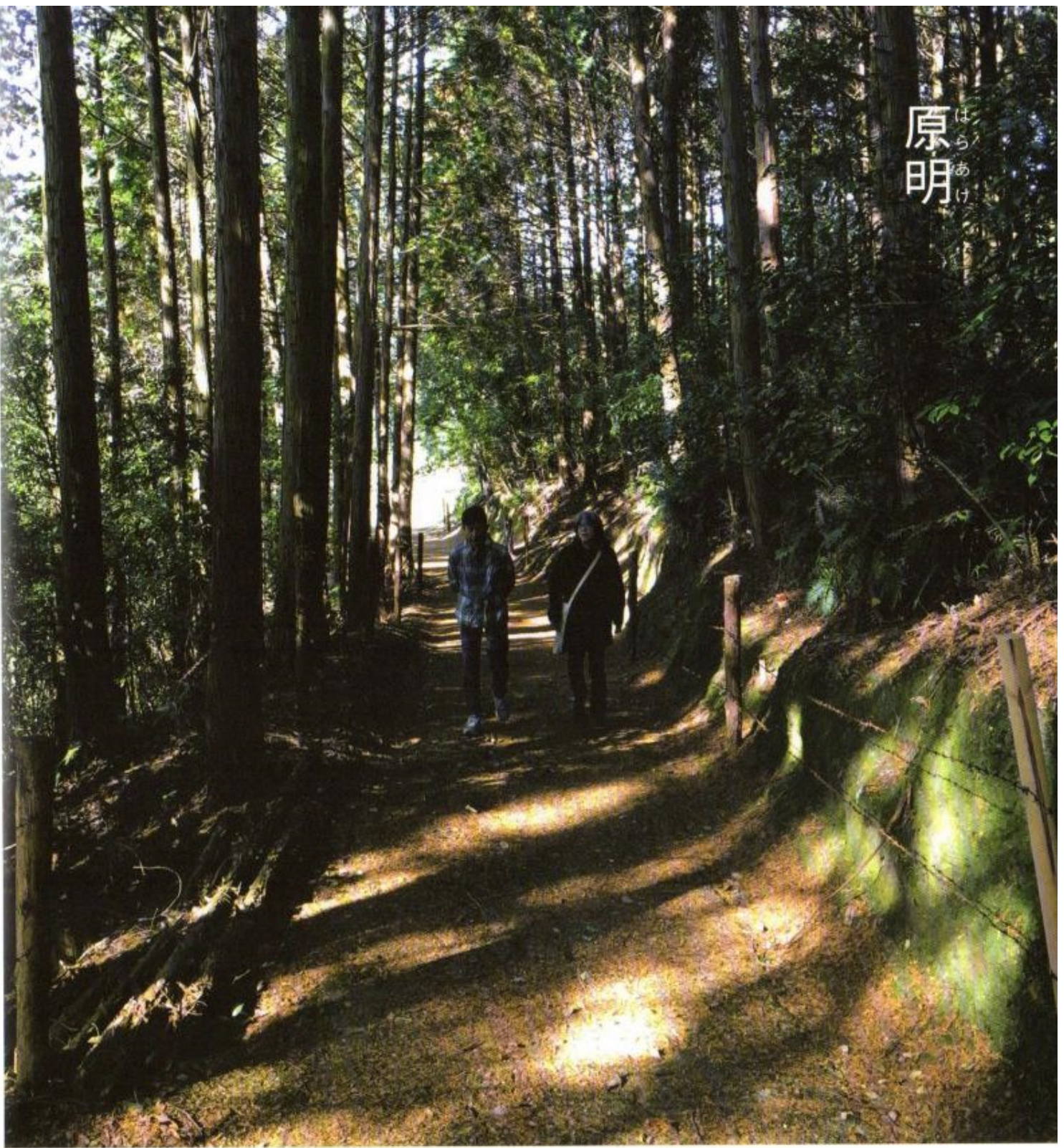
有田町では最も古い窯跡の一つに数えられ、操業開始は一七世紀初頭、操業は三十年弱と推定されている。また調査では九基以上の登り窯を有する大規模な窯場であったことがわかっている。現在窯跡の一部は公園となっており、気軽に散策出来るのが嬉しい。当日、表土を一見しただけでも古唐津から初期伊万里まで様々な装飾技法を施した陶片、磁片が散在しており当時の隆盛が伺い知れた。なかでも美しい染付のそれらに混じり、古唐津のような力強い総釉



高台の鉢や、一見、「李朝堅手」と思ってしまうような皿の磁片が認められた。昭和の数奇者が著作で「伊万里初源の、初発のもの」と書いたのは同窯出土の小盃であることは良く知られている。



原明はらあけ



③ 原明古窯

六基の登り窯を有する古窯跡で一九八〇年に国指定史跡に認定された。築窯時期は一七世紀初頭、操業は三十年弱と推定され、有田エリアでは最古期に磁器を焼成した窯、と言われている。前述の小物成や天神森と異なり、市街地より丘陵部に入った長崎県との県境エリアに存在する。近年盗掘に多くあつているため、立ち入り可能なエリアが数年前と比較すると狭められているのが残念だ。古窯跡の中央を貫く農道の脇には無地唐津の陶片に混じり、小物成や天神森と同様に厚手で絵袖、高台の畳つきに糸切りの跡が認められる白磁皿の磁片が多く見られた。



小溝上



④ 小溝上古窯

当時五基の登り窯を有し、有田エリアでは中心的な存在であった古窯跡である。築窯時期は一七世紀初頭、操業は三十年弱だったと推定されている。名前で知れるように中窯跡、下窯跡も同エリアに存在する。道路工事のために遺構の大半が失われているが、物原はある程度残存しており、遺物の表土確認が可能である。唐津をはじめ中国風の、いわゆる初期伊万里の優品を多く産しているが初源伊万里も多数焼かれており、取材当日も美々しい染付の磁片や無地唐津の陶片に混じり、砂目積みで堅牢な白磁のそれが散在していた。金ヶ江氏（李參平）ゆかりの窯である可能性が高い、とされている。



◆ 初源伊万里

古窯巡りを終えて

古唐津、初期伊万里、いずれも時の流れに左右されない「骨董業界の人気もの」である。故に窯跡を訪れ、その場をそぞろ歩く人の目にはそれらの欠片が真っ先に飛び込んでくる。

実際、古唐津数寄を自称する私もそうであった。無地唐津や絵唐津、呉須の美しい初期伊万里なんぞには関心を引かれるが、無地の、初源伊万里白磁皿には今まで全くもって関心はなかったのが正直なところだ。

しかし、今回の「初源伊万里」という見地で、脳内を整えて、訪れた現場では、前述のスタンスでは気付かなかった数多の証あかしが散在している事実じじつに直面し、とても新鮮に感じられた。

そんな新たな「気づき」が今回、取材に関わった我々の視野を広くしてくれたことは言わずもがな、である。

（村多正俊）

肥前陶磁における

「初源伊万里」の位置付け

村上伸之（石田町教育委員会学芸員）



勝見さんが数十年かけて少しずつ蒐めてきた
初源伊万里の小盃コレクション。

最奥から時計回りに

- 口径7.0cm 高4.5cm
- 口径7.7cm 高5.0cm
- 口径7.5cm 高5.0cm
- 口径6.5cm 高4.0cm
- 口径7.5cm 高5.0cm
- 口径7.5cm 高4.8cm
- 口径7.3cm 高5.0cm
- 口径7.0cm 高4.5cm
- 口径7.5cm 高5.0cm

1. 「初源伊万里」雑感

先日のことである。突然、「初源伊万里」なるものについて、意見を聞きたいのご相談を受けた。最初は「初期伊万里」の聞き違いかとも思ったのだが、お話を聞きすると、やはりそれとは別物らしい。

有田で窯跡など近世遺跡の発掘調査に携わって、すでに三十年ほどになる。過去、有田で行われた発掘調査の三分の二以上を手がけてきた経験上、現実的には初源伊万里なるものを一度も目にしていないはずはない。ただ、**とんと思いがたるものがないのだ。**もちろん、考古学や美術史など、現在の陶磁史研究業界の中でも聞いた覚えもなく、あらためて、分厚い『角川日本陶磁大辞典』を引っ張り出してはみたものの、やはり、該当する項目は見当たらない。

ただ、古美術の世界ではそれなりに知られた用語らしく、どうやら、ざっくりと言えば、陶器（唐津焼）から磁器（伊万里焼）への移行途上の、まだ唐津焼の作風を色濃く残す白磁などを指すらしい。なるほど、それなら窯跡の発掘調査では、その過渡的な様相に気づくはずもない。磁器は単に陶器技術の熟達により、徐々に形づくられたものではないからだ。当初から独自のコンセプト上で開発されており、陶器と磁器の間というものは



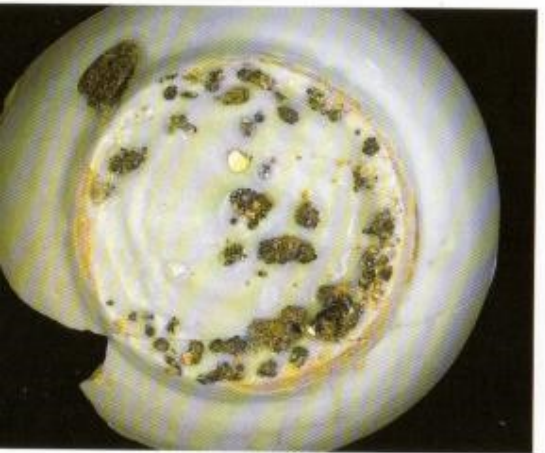
資料01a 初源伊万里に類似する唐津焼小坏
〔小物成2号窯跡〕(側面)



資料01b 同(底面)



資料02a 初源伊万里小坏〔小物成2号窯跡〕(側面)



資料02b 同(底面)

存在しないからである。

2. 唐津焼の技術

肥前の近世窯業については、主体的には文禄・慶長の役（一五九二～九八）などの際に、朝鮮半島から渡来した人々の技術をベースとする。つまり、基本的に一六世紀末頃の李朝の技術とは共通するものの、逆に、既存の国内窯業との技術的な接点は皆無なのが、一つの大きな特徴である。

当初渡来陶工が手がけたのは、陶器である唐津焼であり、当然のことながら、技術的には李朝そのものである。ところが李朝とは製品のスタイルが異なるのだが、これは同じ施釉陶器として、いわゆる美濃の桃山陶の競合品を目指したためである。消費者である、日本の慣習や嗜好が色濃く反映されているのだ。

では、この唐津焼の源流となった技術とはどんなものなのか。当時の朝鮮半島では、高麗青磁に由来する日本で三島手や刷毛目と呼ばれる陶器の技術はほぼ途絶えており、すでに白磁全盛の時代であった。李朝の白磁は、分院と称された官窯でわずかに青華白磁（染付）が見られるものの、鉄絵はあっても、基本的には無文の製品がほとんどである。この頃の白磁は広



資料04 焼成時に熔着した灰釉陶器皿(上)と白磁皿(下)[天神森3号窯跡]



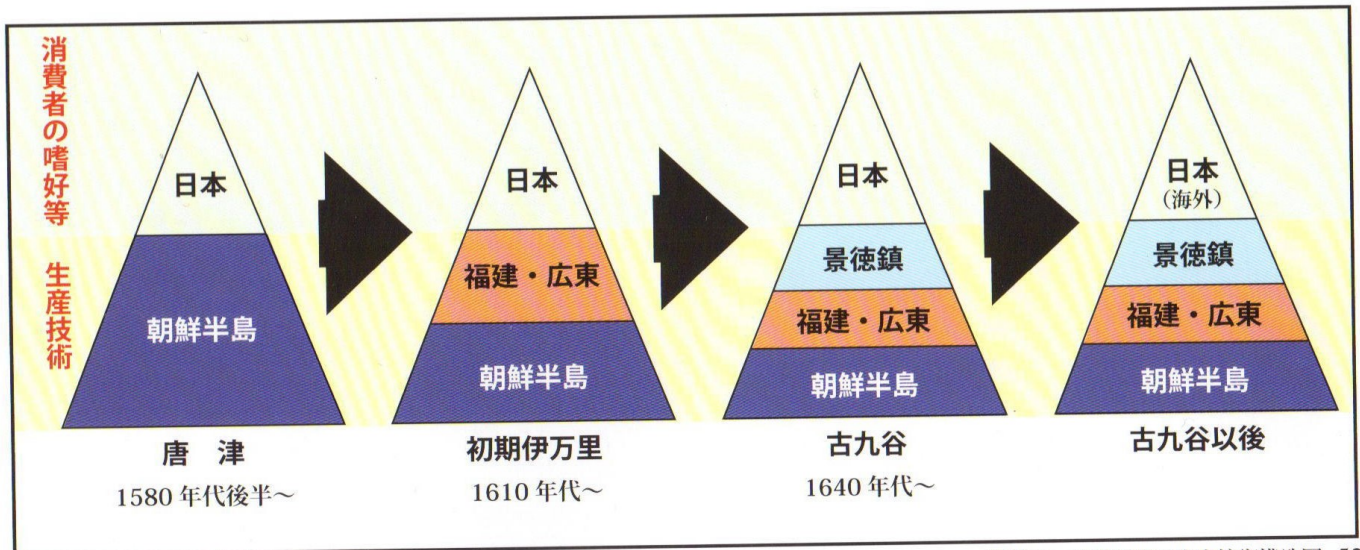
資料03 焼成室床面上の陶器と磁器の併焼状況 [小物成2号窯跡]

範な地域で生産され、磁器質のものもあるが、むしろ陶器質に近い粗質白磁が多い。実は、この粗質白磁こそが唐津焼の主な技術的源流であり、日本では陶器に分類されるが、主体的には李朝白磁の技術に由来する。たとえば、唐津焼には無文の製品が多く、施文が鉄絵なのはそこに起因するのである。

3. 伊万里焼の技術

磁器である伊万里焼は、唐津焼とは大きく見た目は異なるが、一六一〇年代の中頃、有田の陶器生産の窯場の中で、突如として焼成がはじまる。つまり、技術的には併焼される陶器と大差はなく、同じ李朝の技術基盤上に位置する。そのため、同じ陶工集団によって、同じ登り窯の同じ焼成室で、同じ窯道具類を共用する形で生産されはじめた。つまり、それぞれは完成された形の唐津焼と伊万里焼として共存しており、両種の差は単純な技術の熟練度ではない。そのため、たとえば施文の際に陶器は鉄絵が施されるが、磁器は染付であるように、同じ陶工集団の中でも、陶器と磁器の技術は別のものとして使い分けられる。

この唐津焼と伊万里焼の視覚的差を創出する最大の要因は、ターゲットとする競合製品の違いである。唐津焼が国内産の施釉陶との競合を図ったのとは異なり、伊万里焼は当時日本の磁器市場をほぼ独占していた中国製品を目指した商品である。そのため、中国磁器と同じ磁器質であることを求め、同様に呉須による施文、つまり染付製品を基本とした。ただし、国内では産出しない呉須の入手やその用法、製品からは製作方法を押し量ることのできない型打ち成形の技法など、李朝の技術では不足する部分を補完的に中国から導入している。これは外部との接点を持ち、情報収集力にたけた商人等の介在なくしてはなしえることではなく、当初からマーケットの動向を熟知した上で、陶工の持つ李朝の技術に反しても、あえて中国風磁器に固執した成果と捉えられる。つまり、唐津焼の技術の単なる延長



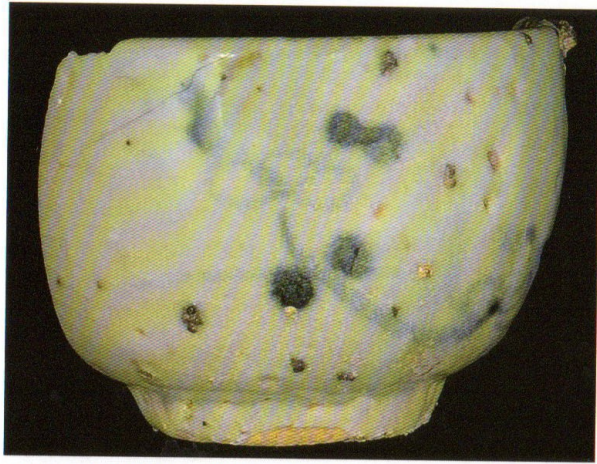
資料05 肥前陶磁の生産技術構造図 52

線上に、伊万里焼が位置するわけではないのだ。

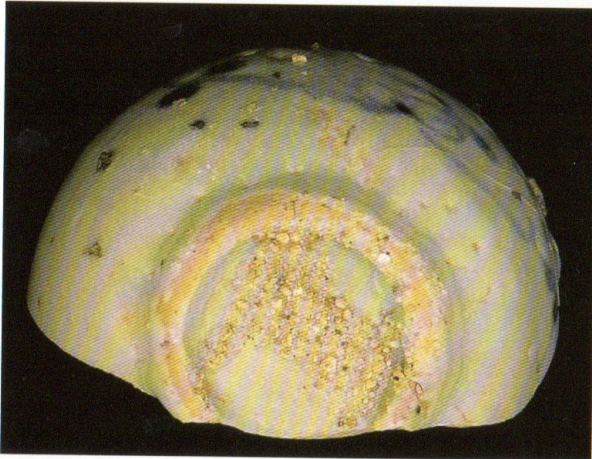
4. 初源伊万里の位置付け

見てきたように、今日の最新の調査・研究が物語るのは、陶器の技術をどう磨き続けてもその先に磁器の開花はない、という容赦のない現実である。生産の現場は李朝そのものながら、むしろ消費者の目に留まる製品からは可能な限り李朝色を排除すべく、事前に周到に準備してスタートラインに立ち、号砲とともに、脇目も振らずひたすら中国風にまい進したのが日本磁器なのである。李明風り唐肆売、中国風の伊万里焼、この間には大きな溝があり、ここに李朝風の磁器たる初源伊万里なるものに入る余地はないのだ。

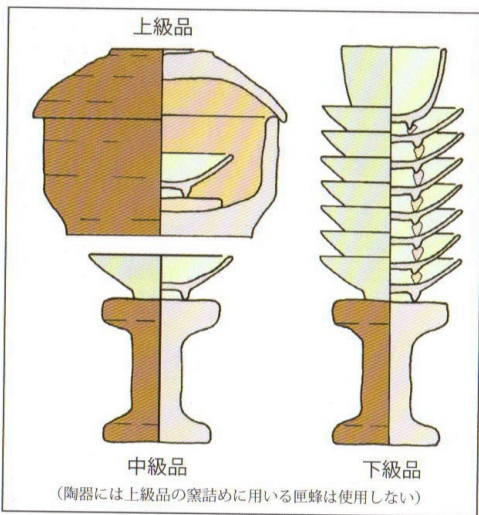
初源伊万里は、皿や碗、鉢などの器種も見られるものの、主体となるのは白磁の小坏類だという。高台が低めで高台内の削りも浅く、畳付に釉を残すことなどが特徴らしい。こうした製品は、陶器と磁器を併焼した



資料06a 初源伊万里に類似する染付小坏 [向ノ原1号窯跡] (側面)



資料06b 同 (底面)



資料07 肥前陶磁の窯詰め技法

一六三〇年代以前の窯場では格別に希少なものとわけてはなく、類似した特徴を持つ染付製品なども比較的多い。ただし、この初源伊万里風染付製品の施文には、窯場を通じた共通の約束事があり、濃み(だみ)を施さない簡素な線描きのみが文様の特徴とする。染付製品とはいえ、高価な呉須の使用は極力抑えきみなのである。

ところで、肥前の場合、李朝と同様に、製品のランクによって異なる窯詰め方法が用いられる。高級品は匣鉢に詰め、中級品はトチンやハマなどの焼台類に一点ずつ乗せ、下級品は目積みして重ね焼きする。実は、初源伊万里が李朝風である唐津焼に近い印象を受けるのは、この製品のランクに起因している。作りがラフで、畳付の釉剥ぎも完全ではなく、砂目積みするものも珍しくない。つまり、下級品やそれに準ずる程度のランクの製品であり、磁器質とすることで何とか磁器であることは担保するものの、上・中級品ほどは中国風を意識した気構えが希薄なのだ。

かつて、もっぱら伝世品主体の研究が盛んだった頃、中間的な特徴を持つ製品は、形式学的に時間軸上の中間に置く以外、合理的な解釈はなかった。ところが発掘調査で垣間見える現実には、もっと複雑怪奇でドラマチックですらあり、人々の生々しい奮闘の連続を物語っている。当時の下級品ゆえの、逆に気取らず、肩ひじも張らない自然体のおおらかさ。現代人が惹かれる初源伊万里の魅力は、案外そんなところにあるのかもしれない。

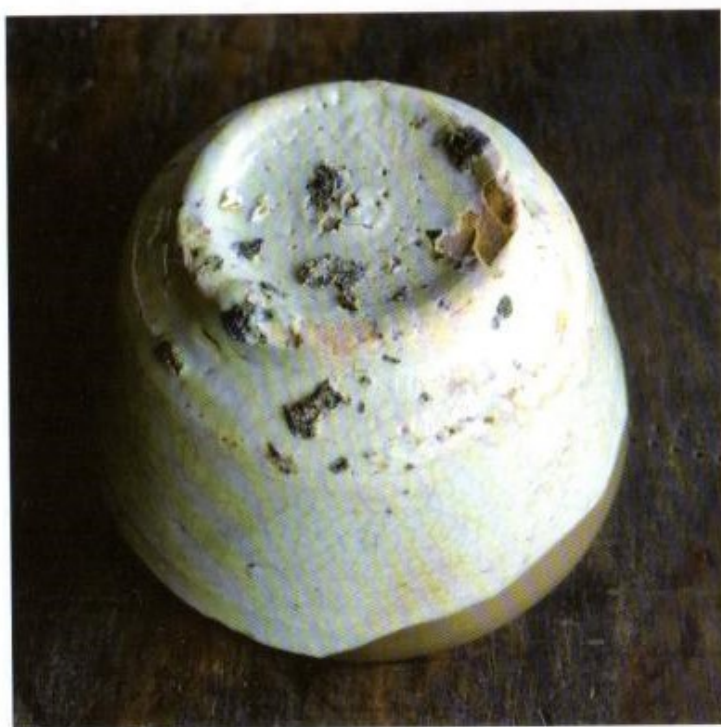
作陶家・山本亮平が

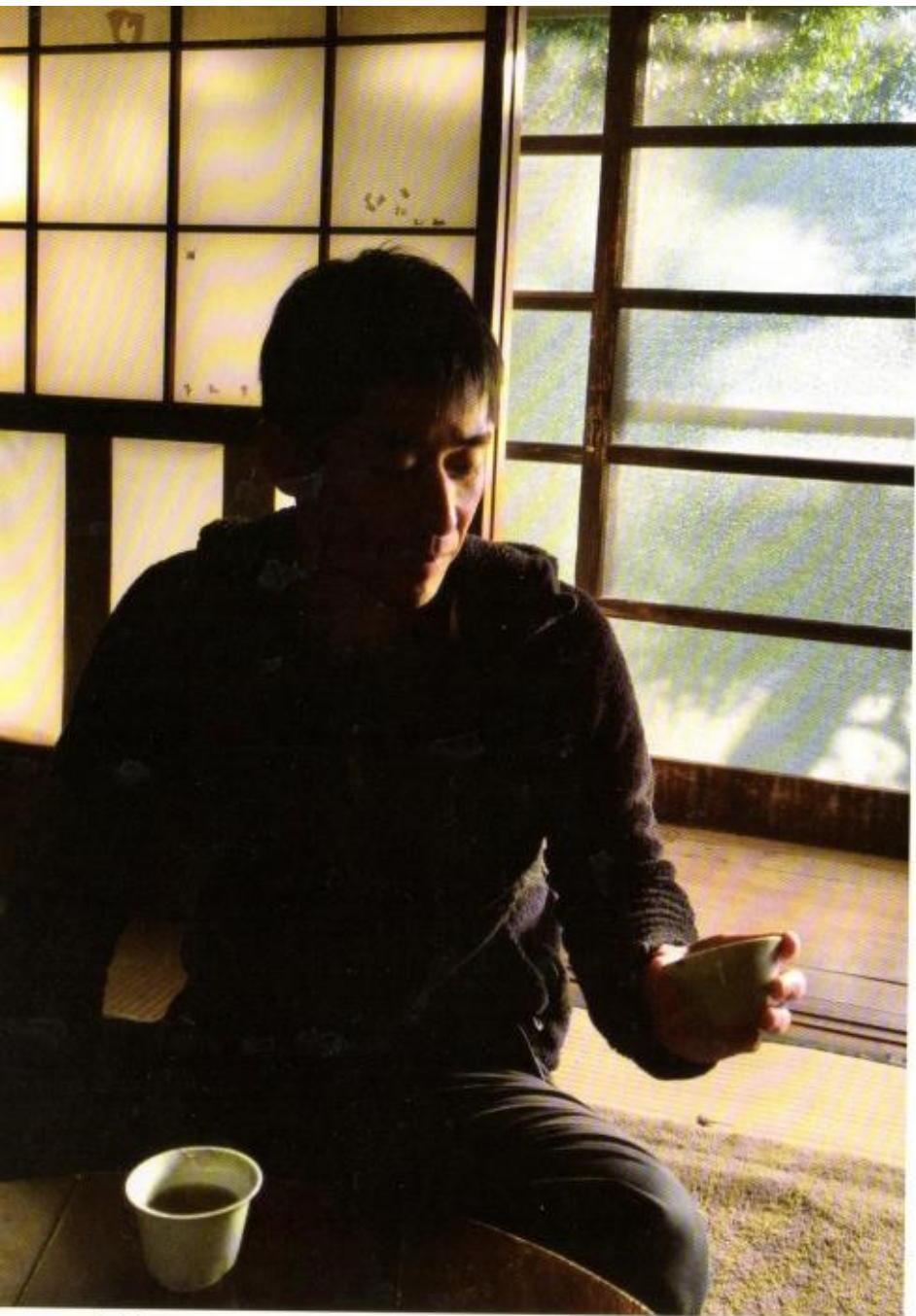
「初源伊万里」にみるもの

山本亮平さんがめざす、親しい蒐集家
所有の初源伊万里壺（小物成窯）
奥：口径7.0cm 高5.0cm
手前：口径5.9cm 高4.1cm

初源伊万里を多く産した窯と言えは
小物成、天神森の二箇所が挙げられる。
そんな古窯に隣接した地で作陶に勤しむ
気鋭の作家がいる。山本亮平、東京都出
身。初源伊万里に魅せられた氏の作品に
は「古と今」が絡み合い、時代性を伴っ
た軽やかさがある。そんな作陶家がめざ
す「初源伊万里」とはなにか？

（聞き手 村多正俊）





山本亮平さん 天神森古窯の近くの住まいにて

—— 初源伊万里の古窯の近くで窯を営んでおられますが、引き寄せられましたか？

山本 たまたまなんです（笑）。こちらに移住した当初は、古陶磁はまったく意識していませんでした。でも今、僕が作るうつわは初源伊万里に確実に引き寄せられていますね。

—— では、古陶磁と向き合うようになったきっかけは？

山本 あるとき友人の矢野君（唐津焼作家の矢野直人氏）がやってきたんです。「何しに来た

の？」と聞くと「砂岩を探してる」と。古唐津が砂岩を水籤すいひした粘土で作られていた、つてのは人づてで知ってはいましたが、当時の僕にはぜんぜんピンと来なくて……。今思えば、あの頃から矢野君は肥前各地を「良い砂岩はないか」と探しまわっていたんですね。

—— そこからですか？

山本 そのすぐ後に小物成古窯こものなりに畑をもっている近所の方が古唐津の陶片を持ってこられて「耕している時に出てきたと。この欠片みたい

なものば、作れんと？」って。今、思えば古いものに関心をもつきっかけはこの方の、この一言だったなあ、と。そこから無地の古唐津陶片がとつともなくかっこ良いと思うようになり、がむしゃらに作陶しだしたんです。最初はいつも使っていた天草由来の素材に鉄分の多い釉薬をかけて作ってたんですが、梶原さん（唐津焼作家の梶原靖元氏）に「全然違う」と強烈なダメ出しを喰らいまして。ギアがトップに入ったのはそこからですね。そして、古いものを理解し、自身の色を落とし込んで作品にしている梶原さんに「窯に通わせてください、勉強させて下さい」とお願いして都合一年ぐらい通いました。「何回も通ってきてもなかつたよ」って、今だにネタにされていますが（笑）。ともかくも色々と学ばせていただきました。

—— 価値観が変わったタイミングで周りを見回すと、実は希少な古窯跡近くに住んでいた、と。山本 そうなんです。凄く偶然だったな、と。今も天神森やら小物成辺りに散歩に行くんですがその当時は落ちていた陶片やら磁片を手にとって時間を忘れてしまって、なんてこともしばしばでしたね。「こういうものを作るんだ！」と思い定まっていきました。

—— それでまずは砂岩で唐津焼を作ることをはじめたんですね？

山本 はい、「砂岩を砕いて陶土を作る」って



ことに興味を持って、矢野君に尋ねました。彼は砂岩のサンプルを持ってきてくれ、細かい所まで教えてくれたんです。見た瞬間に「これ、粘土になるの？」って思わず訊いちゃったくらい、僕には知識がなかった。矢野君は「水簸して、ちゃんとやればなります」と丁寧に教えてくれて。ここで先ほどお話しした、彼の砂岩探しアクションが本当の意味で理解出来たんです。

——それがいつのお話ですか？

山本 四、五年ぐらい前ですね。さらに梶原さんのところに通うようになって、面倒だと思っていた事が急に楽しくなりました。例えば砂岩を「はつる」事とか。これは砂岩から異物を

取り除いたりする事でとても単純な作業なんです。それが、それを一日繰り返すんです。以前の僕なら間違いなく、すぐに飽きてしまったと思いますが古唐津の事を色々考えながら作業をしているとあつという間に時間が過ぎるんです。

——そして現在は陶石で初源伊万里を作ることをめざすようになった、と。

山本 はい、初源です。因みに家内が染付を担当していますんで二人で侃々諤々しながらやっています。参考になるお手本は家の近所にそれこそそこら中に転がっていますし（笑）。

——しかし骨董ファンでも一部しか知られていない初源伊万里を目標に作陶をされている方は

他にいないでしょうね。

山本 確かにいないですね。でも作り手から見ても、古唐津と初期伊万里の境目は本当に興味深い。同じ窯で陶器と磁器を同時に焼いていたわけ。作り手も一緒。素材が違うだけ、というのも興を誘います。

——いま唐津焼の作り手たちは実に多彩ですが、二〇〇五年くらいまで砂岩から作るという人は少なかった。どちらかといえば異端だった。吉野靖義さんと梶原さんぐらい。それを思うと今は随分変わったなあ、と思います。今は梶原さんを筆頭に矢野さん、山本さんが続いている。十四代中里太郎右衛門さんも、砂岩で試していると聞きますが、そのところ、どう思われていますか？

山本 朝鮮半島からやってきた陶工の見地で言えば、彼の地で粗白磁を作っていた人がこちらにきて同じ製法（石から粘土を生成する）ってのは自然ですよ。そんな彼らが死にもの狂いで肥前地方各地どこにでもある砂岩を故国での製法で陶土にして、うつわを焼いた。僕自身、思考錯誤しながら徐々に見えてきている中で、はつきり感じる事は昔の製法は色んな意味で強い、ということですね。

——ただ山本さんの作品は古いものをめざしていながら都会的な……そう、時代性を感じます。山本 そう言っていたいただけだと嬉しいですね。

僕は自分自身の気持ちが入りやすい、素直な形を目指しています。「ゴツツ」としたのも好きですが、そのなかに「スツ」とした感じを作品で表現したいな、と思っています。「都会的で時代性が作品に表れている」というのは最高の褒め言葉です。ただオリジナルである古唐津や初源伊万里のほうが断然洒落ていますよ（笑）。あの素直さ、強さは素晴らしい。飽きない美しさがあります。

——めざす初源伊万里はそれですか？

山本 まずは一つの到達点として、完全な初源の写しを作りたい。そしてなんだろう……陳



今回の取材後に山本さんが作り上げた初源伊万里盃。向かって左の盃は辰紗の皮鯨であるところが洒落ている。

腐な言葉しか思いつかないけれど、明らかに当時のものとは違う、自分を落とし込んだものを創り出したい、ということでしょうか。今まで以上に時代性を反映させたいし、初源伊万里みたいなシンプルなものの方がより一層受け入れられる世の中になってほしいなあ、と思っています。作り手として発掘資料の陶片や磁片を見ると、当時の陶工はとんでもないチャレンジをしているんです。

——古窯に隣接する地に居を構えている、ということはそのチャレンジにプラスでしょうか？

山本 プラスですね！ あと、敢えて有田で唐津焼を作っているというの「あり」ではないかな、と。唐津で良いものを作る人はいっぱいいますしね（笑）。場所的にはアイデンティティの確立には良いかもしれませんが……

——最初の話に出てきましたが「この陶片みたいなもんば、作れんと？」と言われたモノは作れていますか？

山本 出来ている、いや近づいている、というのが実感です。自分としては近づいたら遠ざかり、遠ざかったら近づいてくる……その繰り返しですが……。考え出すと切りがないんですが、原料の砂岩なのか、窯なのか、灰なのか……。当時の陶工を想いつつ、彼らがおかれた環境を鑑みつつ。例えば薪はあまり使いたくなかっただろうし、釉薬の原料になる灰も普通に考えれ

ば落ち葉が自然だと思う。陶工が一番使いやすいもの、手に入りやすいもので作っているはず。水簸は完璧にしているけれど、その後はほっぽっといたり。考えだすともう無限です（笑）。

——他の窯業地も見てきて感じるのですが、唐津焼の作陶家は研究熱心ですね。

山本 梶原さんがシーンを牽引し、若い人達がその後ろ姿を追いつつ、鎚を削っています。もちろん、僕もその一人のつもりです。古唐津の研究も日々進歩している感が在り、それを僕らが実際に作陶して確かめる。近世考古学の見地は大切だな、とっていて積極的にシンクロしています。また今後は熱量の高い人達が一塊になって何かしらトライしてみるのはいかがでしょうか、と思っています。例えば、古唐津や初源伊万里を焼いていた当時のように、分業にトライしてみるのはおもしろいかもしれません。そんなかで昔のまんまの形も作るし、全く新しいものを作るというような。

——それでは最後に一言、お願いします。

僕自身は引き続き丁寧にモノに接し、自分を高めて行きたいと思っています。それはそれとして、天神森や小物成は本当におもしろい古窯跡です。ぜひ現地においで下さい！ その折りは近接の私の窯においでください。古陶新陶談義で盛り上がりましょう。

初源伊万里を 定義してみる



唐津の陶片が付着した初源伊万里盃（小物成窯）

古唐津、初期伊万里等は近世考古学としても極めて細やかな研究と分類がなされています。しかしかんせん、初源伊万里に関しては前述のようにここまで一顧だにされず、また、骨董の見地からも一定の評価を得つつも「ごくごく一部の、好事家のもの」とされてか、蔑ろにされていた感は否めません。

本特集を好機として、些か乱暴ではありますが「初源伊万里分類律」として纏ってみました。それには「近世考古学」における考察、更には我々が日々愉しんでいる骨董への思いを基本に置いている事も記しておきます。

初源伊万里とは……

① 一七世紀初頭、現在の佐賀県西松浦郡有田町にあった小物成こものなり、天神森てんじんもり、原明はらあきなどの窯で焼かれた磁器。小盃が多く、他に皿、碗、鉢などが見られる。

② 朝鮮人陶工により、陶石等を精製した素地を成形し、素焼きせずに釉薬を生がけして焼成され、有田エリアでは古唐津と呼称される唐津陶や現在、初期伊万里と呼称される中国風の磁器と同時に焼かれていた。

③ 器形はほぼ古唐津と同じ。小盃に関して言えば、筒形、碗形、朝顔形等がある。

④ その多くは高台の釉剥ぎがなく、畳つきに糸切り跡が残る。高台の削りは浅く、目跡の過半は砂目である。

⑤ 濃みだのない、シンプルな染め付けがされているものも存在する。

⑥ 製法

◇ 古唐津↓砂岩を水籤し粘土を作り、成形、砂岩由来の釉薬（適宜、鉄、木灰等の添加物を加えヴァリエーションを加える場合も有り）をかけ、焼成。裝飾技法には鉄絵等がある。

◆ 初源伊万里↓陶石を水籤し粘土を作り、それを成形、陶石由来の釉薬をかけ、焼成。裝飾技法にはシンプルな染付がある。



左が初源伊万里、右が古唐津。いずれも小物成窯の発掘品。形状はまったく同じ、違いは素材だけ。

上記は初源伊万里に対しての言わば「タタキ台」のようなものであり、これをもって多くの知見を有する諸先輩方のご意見により磨き上げていく事が出来れば、それに越した事はありません。

一七世紀初頭、初源伊万里は唐津焼の成功を経験した日本人の緻密な準備を持って朝鮮陶工の手により生産が開始された、と考えられます。朝鮮風のやきものである唐津に倣い、形状はそのまま、

庶民向けの、白く清潔な器として世に出ました。時を同じくして高級ラインである中国風磁器（今で言う初期伊万里）の生産も開始され、その結果、後者は市場に受け入れられ、以降生産ラインは基調が中国風となり、興隆期を迎えます。一方初源伊万里は、と言えば敗者の常として市場より消えざるを得ませんでした。市場を席巻した唐津もその後を追いつき、朝鮮風は一部を除いて肥前陶磁より消えてしまいました。

今回、骨董を愉しむ者として初源伊万里の誕生から終焉への変遷を検証する事が出来、今まで以上に理解を深める事が出来ました。また、行動を共にした作陶家達が今まで以上に初源伊万里に向き合い、創作活動を活発化させた事をとても嬉しく思っています。

骨董の愉しさは「モノが持つストーリー」を想い、モノに触れる事」だと思えます。

桃山の酒器であれば、豊太閤の夢を想い、無地唐津の筒に酒を酌む、といった態。

一方で「自らの足で現地を訪れ、歴史を検証し、自分なりにそれがなんたるかを掴み、理解すること」も愉しみ方の一つ、と思うに到りました。今回の「初源伊万里をたずねる旅」は正にそれ。取材を通じ、私たちはそれらを重ね、編み、日本という国が育んで来た文化に丁寧に接し、次世代に継承して行きたい、改めてそう強った次第です。